

# あめのちはれ …春合宿大杉谷組…

沢木 至 記

…プロローグ…

昼過ぎに降っていた雨は完全にやんだが、さすがに空は厚く雲に覆われ、星の姿は見えない。冷たい春の夜風に乗って吉野川のせせらぎが聞こえてくる。川沿りの一軒の民宿の裏手に5台の自転車が長蛇を繰え、ポンチョやシートをかぶり眠りについていた。

…第1章 決心 …

狂木劣(Kuruki Otoru)は、横須賀線のシートに座りながらまだはっきりと決心できないうちに自分自身に嫌悪し、悩んでいた。大体後は留年の責任の半分はクラブにあると考えた。毎日毎日、部室で麻雀をし、遊んどばかりいって進級できる程には彼は要領のいい人間ではなかったのだ。そしてそんな時に、やれ合宿だの、それ大杉谷だのと楽しそうに、ほしやいどる先輩の花谷愛(Hanaya Hen)や、継木光(Nawaki Hikaru)らの態度が気にさげった。しかし彼は現実にはこうして既に集合場所の東京駅に向かっている。後には戻れなかった。東京駅に着き、雨が降り終えてから、鞆行袋をかつぎ、その重量を右肩に感じながら彼はようやく決心した。居直ることにした。

東京駅の階段を自転車をかついで、狂木は約束の9番線へと向かって歩き出した。居直ってみたところ、前途多難だなあと感じながら狂木の足どりは重かった。

またきょうも雨だった。もう2日もここに缶詰めだった。食堂で天気予報を見る。あすは晴れそーだなどと話しながら、布団を敷き、ぼんしの部屋に戻り、このところの日課となつて11階階段闘争を始める。

また、加藤長介(Katō Chōsuke)が景気良く上がった。「手エツ! まったくかなぬ収えや。」と狂木は叫ぶ。まったく加藤のパワーには、体格は横綱級の蚊取木(Katori Kōmu)も歯が立たない。一方、対称的に無口な豊野連治(Mono Renji)は、ずつとガムを音をたててかみながらも真険な表情である。

彼ら、狂木・花谷・榎木・加藤・蚊取・豊野ら6人はT工大のサイクリング部員である。昭和52年の春合宿でここ三重県多気郡宮川村大杉へ来ていた。

合宿が始まって5日目。狂木も心のわだかまりの事は半分忘れて、だんだん従来の明るさを取り戻していった。時々フツと“うんこいじいんだ!”と思う事もあれば、“本当に、こんなんぞ1111んだろうか?”と思ったりもした。確かに、こんなんぞ1111んだろうか?

…第3章 おばあちゃん…

「毎日、ここぞ何をして暮らしていらっしゃるんですか?」と狂木が尋ねてみた。実際、たいしてすることは無いと思えた。しかし、おばあちゃんも顔をほころばせながら言った。

「なあに、これでもする仕事はたくさんあつてなあいい」

このおばあちゃんは、大杉峡谷の中間にある桃の木小屋を管理していたが、電気もなく電話もないこの山小屋で楽しもうに、そしてとても元気に暮らしていた。彼らには理解できない存在なのかもしれない。



「きょうもあしたもあさつても良い天気だよ。このラジオの天気予報は、はずれた事がないんじゃないか…」と笑いながら、彼らが出発するのをずっと見送ってくれたっけ。

#### …第4章 勝ち気…

女のふたりは岡山から来たと言った。数少ない彼女たちの言葉を総合してみても、ほとんどわからぬことばかりだった。でも狂木たちは、彼女らのその純朴さに魅かされていった。全く山歩きとは無縁の装備で、スポーツバッグを背中にしよって無言で歩く彼女らはさすがに男の足にはついでに歩くのは辛かったが、「休みた!!」とはひと言も漏らさなかった。勝ち気ぞして女だった。狂木たちも、彼女らを必要以上にがまわなかった、ただ花谷を除いて。

#### …第5章 ただ感敷…

大台ヶ原の雪道を歩き、木々の下を通り、岩を登りようやく大蛇窟(Daijagura)の上に立った時、狂木は思わず我を忘れていた。「フッ—!!」と叫びたい衝動にかられた。素晴らしかった。これを見ただけで春合宿に来たかいがあったと単純に思った。

自然の大まさに、その偉大な抱擁力の前に、狂木芳は自分の今までの恨みの卑小さを恥じた。桃の木のおばあちゃん生き方がわかった様な気がした。

花谷は、ひとりではしやりで2人の女の子の面にはさまって写真を撮ったり、何が話しては喜んでいた。でも今の狂木は、その姿が目障りには感じなかった。ただ苦笑いして見ていた。

### …第6章 桜…

まさに満開だった。久しぶりにこうやって満開の桜を目にしていた。なんか、とても晴れ晴れとした気分がペダルをこいだ。でも、しだいに見物客の多さと傍若無人さに腹を立て始めた。とにかく、長年住みなれた家に帰る様なつもりで美杉旅館の前まで来て彼らは驚いた。店では全く見知らぬ女の子が2人忙しそうに働いていたのだ。

彼女たちもまた、田舎の素朴な娘たちであった。「お店が忙しい時期だけバイトしてるの。」と話してくれた方の、おさげ髷の良く似合う娘は、本当に素直なかわいい娘だったけど、例によって花谷が口を出し始めるとちよっぴり警戒心を抱いたのか、無口になった。もうひとりの娘は、まったく最初から彼らを相手にしていなかった。当然、からかわれたのは彼らの方だった。

でも翌朝、曇った大杉をいよいよ去る時、彼女たちは最後の最後まで、完全に彼らが見えなくなままでずっと手を振り続けていたっけ。

狂木は心地良くハダシを踏み考えつた。大杉谷は良い所だ  
た。良い人達とめぐり会えた。旅って、こんな具合にその土地  
の人々と触れ合ってゆくことなのかな。

### …第7章 夜 …

ボンカレーの夕食は簡単で良い。食事が終わるとさっそくたき  
火が始まる。火の事になると榎木は必死である。そして酒を飲む  
事になると、狂木は心が踊った。確かに、酒を飲みながら語り合  
うのは気分がいい。特に、こうやって野外で「テ」に火を燃やし、  
そこの囲んで語るのは。

「リアカーなき大村、どうせ借りるとするもくれな馬力。」など  
と加藤が自慢気に教養をひけらかし始めた。全く訳のわからな  
い連中ばかりだった。こうやって話し始めると、とどまる所を知ら  
ずに話したがる榎木や花谷や加藤。それに比べ、何やら黙って  
いる喪野みたいな奴もいる。「でも、うん、こうやって話しする。こ  
れがいいんだ。うん！」と狂木は感じた。

確かに自転車には、あまり乗らなかつたがもしいない。でも、  
これだっサイクリング部の合宿だぞーと言いたかった。合宿に  
来て良かった。こんな楽しい思いは何年ぶりだろう？ 狂木は酒  
の酔いの中でぼんやりと考えつた。

### …第8章 豪華版 …

「最後の最後まで型破りな合宿だなあ。だいたい、こんな布団に  
こんなに7カ7カの布団の上に寝るの俺たちくらいなものだ」

ろうな。”と他の班の連中の事を思うと思わず笑いが込み上げてきてしまう。

最後の晩の宿泊地として彼らが選んだ民宿は、麻雀完備、居間30畳、寢室18畳の合計48畳という超豪華版ぞであった。この48畳を彼ら5人で占領し、ビールを飲み、腹いっぱい食い、麻雀をやりとして、このフカフカの布団。全く彼らに不満のあるう筈がなかった。

狂木は今ひとりでジックリと思ひ返して来た。今思うとあの参加するかどうか出っでイジイジして来た頃の自分が信じられなかった。大杉谷、大台ヶ原の大自然、そして桃の木のおばあちゃん、出会った4人の女の子達、キャンプでの語り、峠を登った自分、いろんな事を思い出すと、本当に良い合宿だったと思う。この合宿に感謝すると同時に、なんかもうやめられそうになリななどと思った。

…エピローグ…

ようやく18畳間が寝静まった頃、ここ東京のとある下宿屋の6畳間のせんべい布団の上で、大杉谷へ行かずに帰京して来た蚊取米がいた。「あしたは春合宿の集日の日だ。あいつら何処にいらんだらうなあ。それにしても気分が悪いなあ。畜生!! 俺の今年の春合宿はなんだ! こいつ駄目だ! チャンチャコリン」

終わり